
悪のミカタ！—正義はなくとも陽は昇る—

Ray

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪のミカタ！―正義はなくとも陽は昇る―

【Nコード】

N7988P

【作者名】

Ray

【あらすじ】

そりゃあ私はどっちかといえば悪を応援したくなるけど、悪の組織に入りたいたんて言ったことないってば！！

ものすごく久しぶりに、特撮を見た。

「あっははー。相変わらず悪の組織はへボいねえ。」

子供向けのその番組を暇つぶしにと見てみたが、これはどうしてなかなか面白い。腹抱えて笑うには、下手なお笑い番組見るよりもずっと楽しい。

「あー、面白かったー。しかしなんで悪の組織はここぞと言うときにチャンス逃すのかなー。まあ、正義が勝つにはしょうがないかあ。」

「悪^{ワル}かったなあ、へボくてよ。」

突然、背後から男の声がかかった。

「ほえ!?!」

ぱつと振り返ると、そこには二十歳くらいのワイルドな雰囲気の良い男がいた。

「な……どっから……!」

恐怖で震える。一体なんなのよー!?

「落ち着け。別にとって食おうたア思わねえよ。てめエみてえなガキ。」

「なっ!?!?」

カーッと顔が熱くなる。

「……あんたにコレを渡しに来た。」

はあ、とため息を吐くと、男は私に綺麗なブローチをくれた。

「何よ、これ……。」

黒を基調とした、中央に紫の石がはめこんであるブローチ。……高そうね。

「まあ使い方は自分で探してくれ。じゃあ、待ってるぜ。」
そう言うと、男はふっと黒い闇に消えてしまった。

「ちよ、説明ぐらいしてきなさいよ!……って、消えた……?」

こんなもんだけ置いて、一体私に……

「私に何させようってのよー!!?」

叫び声は、虚しさを残すだけだった。

「渡してきたか、メフィスト。」

「は、ヘルゲート様。」

声が響く薄暗い室内で、ヘルゲートと呼ばれる“いかにも”悪の組織のボスといった男の目だけが光っている。

「……ところで、その我ら獄悪軍ごくあくぐんの救世主というのは？」

ヘルゲートは男―ワイルドなイケメン―に尋ねた。

「名は竹内京たけうちみやこ。齢15歳の中学生にございます。能力は平均的ですが――」

「……が、なんだ？」

「は、彼女は我らの秘宝・ルシフェル水晶を扱える唯一の人物にございます。」

メフィストはにやりと笑った。

「……ほう、あの水晶を……。なるほど、ならばルシフェル様覚醒は近いということか……。」

勝利を目前にした獄悪軍の首領・ヘルゲートはくつくつと笑った。

「もー、なんなのよー!!こんな高そうなもん返さなきゃ……。」

一方平凡な中学生だった京は、悪の組織の救世主になってしまったとも知らず、ルシフェル水晶とにらめっこしていた。

「……でも、渡しに来たってことは、くれるってことなのよね……

あはっ、私ってばイケメンにプレゼントされたー!？」

京は喜びの舞を踊る。彼がいきなり現れ、消えたことは気にしていないようだった。どったんばったんと足踏みしながら、早速ブローチをつけてみることにした。

「あいつ、使い方は知らんとか言ってたけど、ブローチなんて胸につける以外使い方なんてないじゃないのー……。」

ぶつぶつと京は、「使い方は知らん」の部分だけメフィストのまねをして呟く。そして、ブローチを胸の中央につけた途端――

カッと石が光った。

「きゃっ！ まぶし……！――はあ！？ 何コレ！？」

京は目を見開く。

わかるでしょ、気がついたら変身してたのよ！

「う、うそ……。いつの間に……。」

黒と紫の凝ったデザインのワンピースに、背中には蝙蝠のような黒い翼。胸にはブローチ。ご丁寧な髪型までツインテールに変わっている。まるで悪魔をモチーフにしているようだ。

「もしかして、平和を守る女の子に変身みたいなの……でもコレ黒くて……明らかに悪者っぽい服装じゃない……。」

尖った黒い付け爪をまじまじ見つめていると、またも背後から声がかかった。

「目覚めたか、ルシフェルの巫女よ。」

そう、現れたのはメフィストだ。

「あー！！ さっきの！ あんた、よくも私をこんな格好に……ていうか、なによルシフェルの巫女って！ 妙なことに巻き込んだら承知しないから」

「落ち着けと言っただろう。」

次々まくしたてる京を軽くあしらうと、メフィストは彼女に近寄った。

「な、なによ……。」

京はたじろぐ。

「俺の名はメフィスト。獄悪軍幹部だ。お前はルシフェルの巫女として目覚めた。ルシフェルの力を覚醒させたのだ。これから獄悪軍本部へ案内するぞ。」

「え、“極悪”……？ ま、待ってよ、そのネーミングってつまり悪

の組織じゃ」

「落ち着け。」

ひょいと京を抱えると、メフィストは闇の中へ潜っていった。

(私どうなっちゃうのよー!?)

「待っていたぞ、ルシフェルの力を呼び覚まし者よ……巫女、今日から私の下で働いてくれるな?」

薄暗い大広間へ連れて行かれると、かなり見上げないとつぺんの見えない玉座に、目だけが光っている悪のボスがいた。……ねえ、これ従わないと用済みとばかりに殺されるよね、私?

——曰く、ルシフェルの力はブローチの水晶の中で眠っていて、ルシフェルの巫女の私しか封印を解けないらしい。だから私は悪の組織の幹部として働けと。

そりゃあ私は正義か悪かって言ったらどう見ても悪だし? (カンニング常習犯ナメんなよ!) 特撮とかだってへぼい悪を応援したくなるのは当然だ。誰だってそういう心理になるじゃん? 判官贔屓って言うんだっけ。

……でもさ、自分が倒される悪になるのは話が別だ。負けるとわかってる戦いに手出す? ふつう。……でも断れる状況じゃないよね。背水の陣だわ。だってルシフェルの力が覚醒した今、私がいなくなっても誰も困らない。断ったら、そうか、じゃあ死ねって言われるに決まってる。

(大体なんで悪の組織が実在してんのよー!!!)

「どうだ、受けてくれるか?」

メフィストが、黙って俯いてた私に問いかける。やばいやばいやばいよー!

「そ、そういえば、ここが悪の組織なら、正義の味方は……?」
緊張のあまり声が裏返っている。何やってんのよ私のバカー!

「あ？そうだな、そろそろ——」

そうメフィストが言ったとき、どこからかモニターが現れた。

『——おのれ聖義軍^{せいぎぐん}のジャスティスレッドめ！今日こそは貴様らの命、頂く！』

そこに映った正義の味方は、私が今朝見た特撮のジャスティスレッドに間違いなかった。

「じゃ、ジャスティスレッド！？何よこの人……コスプレえ！？」

騒ぎ立てる京を見て、メフィストは怪訝そうに尋ねた。

「なんだ、知っているのかミヤコ？」

「はあっ！？だってテレビで……いや、なんにも知りません。」

余計なことは喋るなど、脳が警鐘を鳴らす。何訊かれても知らんふりしとこ……。

『ククク、愚かなジャスティスファイブどもめ。いいことを教えてやろう。たった今、ルシフェルの巫女・ミヤコ様がルシフェルの力を目覚めさせたばかりなのだ！』

『な、なんだと！？』

モニターの中の雑魚手下その1が、得意げに私の名を出した。ジャスティスレッドがビクリしてる。

あれ、これってまさか——

「ミヤコ、出番のようだぞ。ジャスティスファイブなど、お前と大悪魔ルシフェル様の力にかかれればひとたまりもないだろう。」

余裕の笑みを浮かべたメフィストが、私にゴツイムチを手渡した。女幹部はムチ使いというのが相場だ。ってそうじゃなくて！

「うむ。ミヤコよ、ジャスティスファイブを蹴散らしてくるのだ！ヘルゲートにまで命令された。私まだ「はい」とは言ってないんだけどー！！」

しかしここは悪の根城。逆らえば殺される。

「は、はいヘルゲート様……この命に代えても、ジャスティスファイブどもを抹殺して参ります……。」

涙目で京はひざまずいた。ちよつとサマになってるのがまた悔しい。

なんとしてもジャスティスファイブを倒さなきゃ……殺されるのはまっぴら御免なのよー！

（待てよ、そういえば――）

ジャスティスファイブのもとへ向かう途中、京はふと思い出す。

「次回のジャスティスファイブのサブタイトルって、たしか……――」

『次回、聖義戦隊ジャスティスファイブ！ “ついに開放ルシフェルの力！ルシフェルの巫女ミヤコ登場！！” お楽しみに！』

（ちょっと作者！夢オチとかにしなさいよ！！これじゃホントに私、悪の組織の女幹部として倒される可哀想な中学生になっちゃうじゃない！聞いてんの！？なんとか言いなさいよ、ちよつと！）

京の悪者生活は、まだ始まったばかりである。

（まあこっからメフィストとの恋物語とか始まったらいいか……って、よくなーい！）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7988p/>

悪のミカタ！—正義はなくとも陽は昇る—

2011年1月4日02時27分発行